

全国学力テストはただちに中止に ～「英語調査」で予想通りの問題点続出～

【学習資料】2019. 9. 6

愛教労全国学力テスト対策担当

7月末に全国学力テストの今年度の結果が公表されました。初めて実施された中学校の「英語調査」について、予想通りと言っても過言ではないような問題点が続出しました。

1 「参考値」で公表されたのに

「話すこと」調査については、「参考値」で公表されました。パソコンが対応しなくて参加しなかった学校があったり、当日の不具合で実施しなかった所があったりした上、参加したのにUSBの不具合で録音データが読み取れないということもありました。また、そもそも、実施の際、パソコン室で生徒間の距離が近いため、お互いの声が聞こえてしまい、「解答の公平性」が保てないという致命的な欠陥がありました。「参考値」は「学力」を客観的に把握する数値ではなかったのです。それにも関わらず、いったん結果が公表されると、「読むこと」「書くこと」「聞くこと」と同等の位置づけで評価されてしまいました。そして、「『書くこと』『話すこと』に課題がある」とされてしまいました。「話すこと」については、「参考値」であろうと結果を公表してはいけなかったのです。

2 USBの読み取り不具合、全国の中学校の17.5%で

「話すこと」調査で、USBの不具合で録音データが読み取れないという問題が全国の中学校の17.5%で起きていたことが明らかとなりました。1校あたり平均すると10名前後の生徒が該当します。ということは、同じ学校ないでありながら、一部の生徒が、あるいは同じクラスでありながら数名の生徒が個人票の「話すこと」の結果欄が空欄となります。該当の生徒にとっては大変なショックとなるのではないかと考えられます。生徒と保護者あてに文科省からお詫び文が届くことになっているようですが、それで済ませてはいけないと思います。実は、昨年度行われた予備調査でもUSBの読み取り不具合が指摘されていました。本実施をすれば起きることが予想できることであつたのですから、文科省は、「話すこと」調査を中止すべきでした。

3 基礎的な文法が身につけていない？

「一人称複数過去時制」や「三人称単数現在時制」など基礎的な文法が身につけていない実態が明らかとなりました。これは、わざわざ悉皆調査をしなくても、抽出調査で分かることです。ただし、抽出調査なら実施してよいということではありません。生徒の実態を知らない人が作成したわずかな問題からは、「学力」は把握

できません。それぞれの学校の英語科教員が、それぞれの生徒の学力を一番よく把握しているのです。3年に1度の「英語調査」は中止すべきです。

なお、中学1年で学習しても基礎的文法が身につけていないということは、小学5・6年での英語教科化などをもってのほかということになります。何しろ、過去形まで学習することになっているのですから。小学5・6年での英語教科化は中止すべきです。

4 平均正答率 1.9%の問題

「書くこと」調査では、全国の平均正答率がわずか1.9%という問題がありました。文科省は、この結果から「書くこと」に大きな課題があるとしています。全くの的外れです。できなかったのは生徒のせいでも、学校での教え方が悪かったせいでもありません。文科省が、解くことのできない難解な問題を作成したところに原因があるのです。なお、以前には、小学校の算数で平均正答率が7%の問題がありました。そのほかにも、正答率が10%台や20%台の問題は毎年のように出題されています。「学力」を把握できるかどうかの段階ではなく、もはや文科省には「学力調査」を行う資格さえないことを示しています。「英語」だけでなく、「国語」「算数・数学」「理科」を含めて全国学力テストはただちに中止すべきです。